

1列王記10章6-9節 「世界の光」

1A 賦与された知恵

2A 輝かせる使命

3A 見ておられる方

私たちの通読の学びは、ソロモンの生涯の後期に入ります。列王記第一 9 章から 11 章です。底中で彼の王国が全盛を極めた場面を読みたいと思います。10 章 6-9 節です。

6 彼女は王に言った。「私が国であなたの事績とあなたの知恵とについて聞き及んでおりましたことはほんとうでした。7 実は、私は、自分で来て、自分の目で見るとまでは、そのことを信じなかったのですが、驚いたことに、私にはその半分も知らされていなかったのです。あなたの知恵と繁栄は、私が聞いていたうわさよりはるかにまさっています。8 なんとしあわせなことでしょう。あなたにつく人たちは、なんとしあわせなことでしょう。いつもあなたの前に立って、あなたの知恵を聞くことのできる家来たちは、9 あなたを喜ばれ、イスラエルの王座にあなたを着かせられたあなたの神、主はほむべきかな。主はイスラエルをとこしえに愛しておられるので、あなたを王とし、公正と正義とを行なわせられるのです。」

彼女とは、シェバの女王です。ソロモンの知恵を聞くために、すべての国の人々がエルサレムにやって来ていました。彼の知恵の噂を聞いた国のすべての王たちもやって来ていました(1列王 4:34)。そしてシェバという地域を治めていた女王が来ました。シェバはおそらく、サウジアラビアの南部、あるいはイエメン辺りだと言われています。ですから、相当な旅です。二ヶ月はかかったのではないのでしょうか。

彼女は非常に多くの有力者と共にやってきて、難問をもってソロモンを試しました。けれども、その質問のすべてをソロモンは解き明かしました。それだけではなく、その宮殿を見ました。そして、一日の食事の量も見ただけでしょう。「その食卓の料理、列席の家来たち従者たちが仕えている態度とその服装、彼の献酌官たち、および、彼が主の宮でささげた全焼のいけにえを見て、息も止まるばかりであった。(10:5)」とあります。それで彼女は、賞賛したのです。ソロモンは何とすばらしいことか、と。

しかし、彼女はこの知恵と富がどこから来ているかを知っていました。9 節、「あなたを喜ばれ、イスラエルの王座にあなたを着かせられたあなたの神、主はほむべきかな。主はイスラエルをとこしえに愛しておられるので、あなたを王とし、公正と正義とを行なわせられるのです。」主の名をほめたたえています。主がこれらのことをすべて行なわれた。ソロモンが優れているのではなく、むしろ主がそれを行なってくださった、と主をほめたたえています。

1A 賦与された知恵

シェバの女王は、ソロモンの宮殿にあったものを見て「息も止まるばかりであった」ということですが、私たちにこの頃、息もとまるほどすごいと思ったことはありますか？私はイスラエル旅行で、「うお～」という旅行仲間たちの声をよく聞きました。自分がたった今、三千年も前のソロモンが作った町の門の遺跡を、この足で踏んでいるという驚き、とか。

その他、皆さんが興味のある分野でそれに秀でている人の業を見ると、あごが垂れたままのことがありますね。私は中高の時、卓球部にいました。それで卓球の世界選手権におけるプレーを見ると、ずっと口をあけっぱなしです。(昔は二・三千円かけてビデオを購入し、試合を二つ・三つ見ていたわけですが、今はユーチューブで百も、二百もある動画を見ることができます。)また、ノーベル賞について私たちは、受賞者に称賛を送りたいですね。最近の受賞者、山中教授の iPS 細胞については日本人の称賛が集まりました。

ソロモンも、そのように優れた人でした。エジプトや東のすべての人の知恵よりも優っていた、とあります。そして、箴言は三千、歌は一千五首あるとのこと。一度、箴言を読んでみてください、これを自分で一つ書くことを考えただけでも一年に一つ書けるのかどうか、というぐらい悩みます。さらに彼は、植物学者であり動物学者でありました。文字通り、生きる百科事典でありました。それで、世界中から王たちもはるばる遠くの国々からやってくるほど、頭脳に秀でていたのです。

けれども聖書ははっきりと、この知恵は神が与えたものだとして記しています。1列王記 4 章 29 節、「神は、ソロモンに非常に豊かな知恵と英知と、海辺の砂浜のように広い心とを与えられた。」確かに彼は、主に、判断力を与えてほしいと願う前から知恵を持っていました。父ダビデが、ソロモンに王権を渡してすぐに、「これこれ、この者をきちんと処分しなさい。」と処罰を指示した時に、「あなたは知恵のある人だから」と付け加えています(1列王 2:9)。けれども、主に願って、主がその願いを聞いてくださってからの彼の知恵は、圧倒的に増加しました。彼の知恵ではなく、主が授かった知恵なのです。

聖書では、生来ある能力があっても、神の御霊が与えられることによって十倍も優れた能力を持つようになった人物の例があります。例えばダニエルと友人三人です。バビロンに捕え移された時は、「その少年たちは、身に何の欠陥もなく、容姿は美しく、あらゆる知恵に秀で、知識に富み、思慮深く、王の宮廷に仕えるにふさわしい者であり、また、カルデア人の文学とことばとを教えるにふさわしい者であった。(1:4)」ということです。けれども、彼らが野菜だけを食するという試練を自ら課して、主が彼らを守ってくださった後に、「神はこの四人の少年に、知識と、あらゆる文学を悟る力と知恵を与えられた。ダニエルは、すべての幻と夢とを解くことができた。(1:17)」とあります。そして、「国中のどんな呪法師、呪文師よりも十倍もまさっていることがわかった。(20 節)」とあります。その後、バビロンの王ネブカデネザルも、メディア人の王ダリヨスも、ダニエルにこのような知恵を与えている神をほめたたえました。シェバの女王と同じです。

けれども、このことが神の御霊を自分の能力を活性化させる助けだと思っはなりません。生来の能力があっても、その能力によって、その肉の力によって神についての事柄に取り組めば、惨めな結果に終わります。モーセがそうでしょう。彼は、パロの宮廷で育てられ、言葉にも行ないにも優れた人となりました。けれども四十歳の時に、同胞のイスラエル人を救い出したいという願いが与えられました。そこで、鞭打っているエジプト人から一人のイスラエル人を助けようと思って、そのエジプト人を殺しました。そして次に、イスラエル人とイスラエル人が喧嘩しています。そこで悪いと思われたほうに対峙したら、「お前も、あのエジプト人のように私を殺す気か。」と言われたのです。それで彼は逃亡者となりました。

そして彼が羊飼いとて四十年生きて、自分の能力では絶対にイスラエル人を救い出せないということが分かっていた時に神は敢えて彼を呼び出して、イスラエル人のところに行きなさいと命じられたのです。主の御霊が彼に留まり、そこで彼は大いなる業を行なうことができました。

私たちには、信仰を持つ前から与えられている先行する恵みと、キリストを信じることによって神の御霊が授けてくださる賜物の二つがあることを知らないといけません。パウロが、自分が使徒となったことについて、このように言っています。「けれども、生まれたときから私を選び分け、恵みをもって召してくださった方が…(ガラテヤ 1:15)」パウロはキリスト教に対する迫害者でした。その彼が、信仰を持つ前から、実に生まれた時から神が選び分けてくださったというのです。どうして、そんなことがあるのでしょうか？

彼は、ギリキヤのタルソ出身でした。タルソは、ギリシヤ文化の濃厚なところであり、パウロはユダヤ人でありながら、ギリシヤ語は流暢に話し、ギリシヤの文化や考え方をよく知っていました。けれども彼は生粋のヘブル人でした。ユダヤ人の両親から生まれただけでなく、エルサレムに行き、ガマリエルという学者から教えを受け、律法に精通していたのです。さらに彼は、生まれながらのローマ市民でした。私たち日本人は市民権を当たり前のように持っていますが、当時、奴隷によってその社会が成り立っていたローマでは市民権は特権でした。それを生まれた時から持っていたのです。

この三つ、ヘブル人であり、かつギリシヤ語を話し、かつローマ市民権を持っていたというのは、彼が異邦人へ宣教を行なう時に何一つ欠けてはならない要素だったのです。聖書に約束されているキリストを宣べ伝えるのですから、聖書に精通していなければいけません。そして、この福音を異邦人に伝えるのですからその言葉と文化や思想を知っていなければいけません。そして、宣教旅行をするのですから、法律的に守られている地位を得ていることによって、彼への物理的制約はかなり取り外されていました。彼が信仰を持つ前から、神は予め彼にこれらの能力や地位を与えてくださっていたのです。

コリント人への手紙第一 4 章 7 節には、パウロがコリントの信者たちを戒めている言葉が残って

います。「いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。」すべて自分にある良いものは、神から来たものです。それに関わらず、あたかも自分のものであるかのように誇っていることに、戒めを与えました。私たちは、褒められる時に違和感を抱かないでしょうか？主に与えられたものであるのに、あたかも自分自身が成し遂げたこととしてほめられると、違和感を抱きます。

本文に戻りますと、シェバの女王が、ソロモンをほめていながらも、実は主ご自身に栄光を帰していることに気づきます。10章1節に、彼女がソロモンのところに来ようとしたきっかけが、「**主の名に関連してソロモンの名声を伝え聞き**」とあります。単にソロモンの名声ではなく、そのような名声を持つ彼をお立てになった主ご自身に関心を寄せたのです。そして、彼女のソロモンをほめる言葉にもう一度、注目します。9節です、「**あなたを喜ばれ、イスラエルの王座にあなたを着かせられたあなたの神、主はほむべきかな。主はイスラエルをとこしえに愛しておられるので、あなたを王とし、公正と正義とを行なわせられるのです。**」シェバの女王は、ソロモンを見ているのではなく、実は主ご自身を見ているのです。主がイスラエルをとこしえに愛しているから、ソロモンを王として、公正と正義を行なわせている、と言っています。

このように、ソロモンは自分を言い広めているのではなく、主を証していました。この後にシェバの女王は金、バルサム油、そして宝石を王に贈りましたが、この姿はまさに主イエス・キリストご自身に贈り物を携えてくる異邦人を表していました。私たちが先ほど交読したイザヤ書60章は、まさにその預言です。主イエス・キリストが再臨されます。そしてエルサレムに留まられます。その栄光の輝きによって、エルサレムに異邦人らが集まってきます。そして、海の富がエルサレムに移され、国々の財宝がエルサレムのものになる、という預言になっています。幼いイエスに、東方からの博士が黄金を携えてきましたが、それもイザヤ書60章を反映したものとなっています。

イエス様は、ソロモンを見て、そこに主ご自身を見ていた女王についてこのように話しておられます。「**南の女王が、さばきのときに、この時代の人々とともに立って、彼らを罪に定めます。なぜなら、彼女はソロモンの知恵を聞くために地の果てから来たからです。しかし、見なさい。ここにソロモンよりもまさった者がいるのです。(ルカ 11:31)**」彼女は、ソロモンにある主の栄光の輝きに応答したのです。

2A 輝かせる使命

これが、神の民に対する、神ご自身の御心です。世界の光として輝くことです。主はイスラエルに対して、「**…あなたを民の契約とし、国々の光とする。(イザヤ 42:6)**」と言われました。そして、イエスご自身が、弟子たちに「**あなたがたは、世界の光です。(マタイ 5:14)**」と呼ばれたのです。

そしてイエスは、光は隠すものではないと戒められました。「**また、あかりをつけて、それを柵の**

下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。(マタイ 5:15-16)」光は輝かすから意味を持っているのであって、隠しているのであれば役に立たないことを話しておられます。

キリストを信じ、キリストに従うと決めている者には、自ずと人々の前における行ないがあります。その初めの一步は、バプテスマです。新約聖書には、バプテスマを受けないでパラダイスに行った、イエス様の横で十字架につけられた罪人もいましたが、そうではない者たちは、イエス様を信じたら水のバプテスマを受けていました。自分は確かにキリストにつながる者になったのだ、確かに自分の罪のためにキリストが死なれて、葬られて、よみがえられたと人々の前で示すのです。

イエス様は、こうも言われました。「ですから、わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。しかし、人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。(マタイ 10:32-33)」私たち人間は、全てが最後の審判に出廷しなければいけません。そこで、神に対して申し開きをしなければいけません。イエスを人々の前で認めた人は、この審判の席でイエス様が父なる神に、「わたしはこのことのことを知っています。」と仰ってくださいます。なので、何の問題もありません。けれども、人々の前でイエスを告白しない人は、イエスも父なる神の前でその人について口をつぐむ、と仰られているのです。

なぜ、私たちは隠してしまうのでしょうか？一つに、恐れがあるからです。イエスがこの言葉を語られた背景は、イエスを告白することによって殺されてしまうかもしれない、という状況があったからです。人を恐れて、それで告白しないのです。けれども、恐れて退く者は滅びるとヘブル 10 章 39 節にあります。

他に隠してしまう理由として、神への不信感があるでしょう。タラントの喩えを思い出してください。五タラント受け取った者、二タラント受け取った者は商売をして儲けを得ました。けれども、一タラント受け取った者はそれを地の中に隠したのです。それは、「あなたが、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかっていました。私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。(マタイ 25:24-25)」なのです。イエス・キリストに従っていくというようなことをやったら、今の生活を台無しにしてしまうのではないか、というような疑念が、光を人々の前で輝かせない原因となっていることがあります。

けれども、キリスト者はこの世界において光を輝かせないといけません。それは、この世界における暗やみを明らかにすることになります。「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。…光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです。…そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。実を結ばない暗

やみのわざに仲間入りしないで、むしろ、それを明るみに出さない。なぜなら、彼らがひそかに行なっていることは、口にするのも恥ずかしいことだからです。けれども、明るみに引き出されるものは、みな、光によって明らかにされます。(エペソ 5:8-13) 光を輝かせることは、嫌がられることかもしれません。なぜなら、自分たちが行なっていることが暗やみであることが明らかにされるからです。けれども、これを行なうのです。そうすれば、光であるキリストのところに来る人が出てくるかもしれないからです。

3A 見ておられる方

そして、なぜ光を人々の前で輝かせるのか、その最終目的をイエス様はこう語られました。「天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」自分があがめられるのではなく、父なる神があがめられるようにしなければいけません。ソロモンがそうであったように、自分の行っていることで自分がほめたたえられるのではなく、主なる神をほめたたえる言葉がそこにはありました。

イエス様は、良い行ないをするのに、「人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。(マタイ 6:1)」と言われました。そして、良い行ない、祈り、断食は隠れたところで行ないなさい、と命じられました。これは一見、矛盾しているように聞こえます。片や、人々の前に良い行ないを見せなさいと命じられ、もう一方で隠れたところで行ないなさい、と命じておられるからです。けれども、矛盾していません。人に認められるように行ってはならない、そうではなく、父なる神が認めてくださるように行いなさい、という意味です。イエス様は、「あなたの父が、あなたに報いてくださいます。(マタイ 6:4)」と言われています。

私たちの内には、人に認められたいという肉の欲求があります。人の注目を受けたいという思いがあります。あるいは、人から悪く思われたくないという強い動機があります。人にどう思われるのかという動機が、それが主のために働くべき奉仕までに及びます。けれども、主はそのような奉仕を受け入れられません。人を相手にする行ないではなく、神を相手にする行ないでなければいけません。

イエスとユダヤ人との対話に注目すると、この違いが如実に分かります。ヨハネ 7 章で、ユダヤ人たちが、「この人は正規に学んだことがないのに、どうして学問があるのか。(15 節)」と驚いている時に、イエス様は、「わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わした方のものです。」と答えられました。父なる神に命じられていることに、イエスは完全に集中しておられたのです。父が語られることを語り、父が命じられることを行なっているにしか過ぎない、と言われているのです。その一方で、「自分から語る者は、自分の栄光を求めます。(18 節)」と言われます。人に対して何を語ろうか、ということに気になっている人は、自分の評価が中心となり、自分の栄光を求めることになるのです。

イエス様は、「わたしは人からの栄誉を受けません。」と言われ、ユダヤ人指導者については、

「互いの栄誉は受けても、唯一の神からの栄誉を求めないあなたがたは、どうして信じることができますか。(5:44)」と言われました。互いに自分たちのしていることを確認し合っているのですが、父なる神からの認証については無頓着でありました。パウロは、割礼について同じことを語りましたが、「かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です。その誉れは、人からではなく、神から来るものです。(ローマ 2:29)」と言いました。

どのようにすれば、良い行ないを人々に見せることができるのか？しかも、その行ないが父なる神をほめたたえるようにさせていくようになるのか？その答えは簡単です。人ではなく、神を喜ばせることです。神に命じられたことを行なっていれば、それが自分からではなく、神からのものであることを自ずと理解できます。しもべが、ただ主人の命じたことを行なったままです、と答えるのと同じように、自分が主人を喜ばせただけです、と答えることができるのです。

そして、自分の回りで真実と正義と善意の実が結ばれていきます。人々が喜び、人々が解放され、人々が平和に満ちる実が結ばれていきます。それらは自分が何かを行なったから、というのではないことを自分自身が知っています。他の人は、「あなたがすごいから。あなたがこういうことをやったから。」というかもしれません。そして愚かにも、「そうかもしれない」と自分を騙して信じてしまうかもしれません。けれども心は知っています。これは神が行なわれたことだと。

最後にお読みしたいのは、ローマ 11 章の最後です。神をあがめる、神に栄光を帰すとはどういうことかを端的に述べています。「**というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。(36 節)**」すべてのことが、自分ではなく神から発しています。そしてすべてのことが、今、神によって成りたっています。これが分かれば、全てのことが神に至ることを知るのです。だから栄光が神に行きます。自分ではなく、神なのです。

どうか世界の光になってください。皆さんが、主に目を留めて生きる時に、主が必ずご自分の栄光をもって周りに照らしてくださいます。主ご自身でいっぱいになってください。主は大きく祝福してくださいます。祝福されることを恐れなくてください。むしろ、神に思いっきり栄光を帰してください。主ご自身が成し遂げたことを、ご自身で喜んでください。主はこれほどすばらしいお方なのだ、とはっきりと告げてください。そして、主ではなく、自分に目を留めている人は、どうかその殻から出てきてください。人にどう見られるのかという恐れから脱出してください。その恐れは自分をいつか滅ぼしてしまいます。そこから逃げてください。そして神への不信を悔い改めてください。神はこんなにも良いお方なのです。この方を信頼しないならば、ではどこに信頼できる真実な方がおられるのでしょうか？